

牧師室から (2021.10.31)

本日、10月31日は宗教改革記念日であるので、この欄もそれにまつわる話を書こうと思った。が、毎年礼拝説教においても、また様々な形でメッセージがあちこちからあると思うので、今回は裏をかいて、同日行われる選挙について少し述べたいと思う。

ある国が民主主義の国かどうかを判定する基準は、その国で選挙が公正に行われているか否かによるというおおよその見解がある。とは言え、20世紀前半のドイツでは、民主主義の模範とも言われるワイマール憲法の下で正式な選挙、手続きによってナチスが台頭したことがある。そのため、後にこの国ではそのことが省られ、原因の一つに比例代表制による政党の小党分立があると考察された。そして現在では、5パーセントに満たない得票率の政党は議席を持たないという、いわゆる5パーセント条項が選挙制度に付与されている。また近年、民主主義の先進国であるアメリカや議会制が整っているイギリスにおいてもポピュリズムが台頭したことは、ある面、民主主義が破綻しているとも言えなくはない。北朝鮮については、正式名は朝鮮民主主義人民共和国であるが、それは名ばかりであり、実質は民主主義的でも共和制でもないのではないか。そして世界のコロナ禍においては、議論を重視する民主主義の国は決断に時間がかかりすぎ、かえって中国のような独裁体制の方が決定、実行が速く、対応がスムーズだったということがある。

それ故に様々なことが省みられて、21世紀には何か別のシステムが模索されるかもしれないが、それでも主流としては、新しい民主主義が考えられていくのではないであろうか。キリスト者は、民主主義すなわちデモクラシー（民の支配）よりもセオクラシー（神の支配）を確立すべきである、という正当な意見があるが、神の支配が完成されるのは終末であろう。だから民主主義の利点を生かして、改革していくのが現実的であるのではないかと思う。かつて政治学者の丸山眞男が、民主主義は永久革命だ、と喝破したが、的を射た発言であると思っている。

(鈴木淳一牧師)